

●あなたは学者に向いているか？

「自分には論文が書けるのだろうか？」、「自分は研究者になれるだろうか？」、「自分は学者に向いているのだろうか？」、「大学院に進学して、自分はやっていけるのであろうか？」

「自分なら何でもできる」という自信家も、中にはいるかもしれないが、大学院に進学する人、研究者を目指す人なら、たいてい誰でもこうした不安を抱えている。

学者になる素質を自分で確認する前に、大学院進学を決断しなければならないのに、進学後に学者の素質がないことを確認したら、人生の大失敗なのである。他の多くの職業選択と同様かそれ以上に、学者の道を選択することには、大変なリスクがある。「高学歴の罠」に陥り、常勤職につけないことなど珍しいことではない。

自分自身は、学者になろうと思って大学院に進学した訳ではなかった。学部を卒業した時、修士論文を書いている最中に、「物足りない。もっと勉強したい」と思っただけである。当時、麗澤大学には大学院がなく、東京外国語大学大学院には博士課程がなかった。慶應義塾大学大学院法学研究科に進学して学位をとる結果になったのは、偶然がなせる業であり、むしろ行き当たりばつりに近い。損得勘定ではなかった。ただし、節目節目で、少なからぬ人に救われた。

そもそも大学院に進学しても、それに見合った経済的な結果はついてこない。少なくとも日本において、学者の経済生活は慎ましいものである。学部卒でよい会社に就職した方が、より安定した生活が営めるであろう。学者に向いているかどうかを計る一つの基準は、他の人が見向きもしないであろうことをとことん追求したいと思い、そして実際にとことん追求する情熱を持っているかどうかである。

政治学者の北岡伸一氏は、学生の時に明治末期のある書簡の年月日を特定したことを、マックス・ウェーバーを引用して以下のように回想している。

それで、書簡の中の挨拶や周辺の記述から時期を絞り込み、封筒にわずかに残った消印や筆の跡などから、ある年月日のものと確定することができた。この間、総合図書館などで参考資料や関連資料を探して、半日ほど駆けずり回っただろうか。

マックス・ヴェーバーは『職業としての学問』の中で、学問的に価値のある達成というものは、専門の中に閉じこもることによってのみ可能であると述べ、「自分の全身を打ち込んで、たとえばある写本のある箇所正しい解釈を得ることに夢中になるといったようなことの出来ない人は、まず学問には縁遠い人々である」と断定している。誰でも知っている有名な一文である。

わずか半日間のことではあったが、年代推定を我に返った私は、このヴェーバーの言葉を思い出して、ああ、自分は学者になれるかもしれない、と思った。三十数年前のことである。

(北岡伸一『外交的思考』千倉書房、2012年、159頁)

あなたがとことん追求した結果が、単に独りよがりではなく、時空を越えて、誰かに共感され、評価され、貢献をすること。もうだめだと思った時に、「こいつを埋もれさせるのは惜しい」と思う誰かに救われること。この人生の賭に勝ち抜き、生き残ること。こうなれば、あなたは学者——教授とは限らない——になれるのである。

経営学者の高橋伸夫氏は、ある古い論文を探しに図書館に入ったことを回想して、以下の様に述べている。

わたしのさがしているものは、1930 年前後に掲載された論文である。棚にならんだ雑誌の背表紙を目で追いながら、ほこりをはらい、めざしている年をさがす。書架の下のほうにようやくそれを見つけて、しゃがみこんで手にとってみる。やや大判の雑誌だ。ほこりをかぶった表紙をめくり、目次を調べ、論文にたどりつく。そのページを大きく見開くと、背表紙がめりめりと音を立てる。その場で活字に目を走らせながら、ふと私はあることに気がついて、背筋がぞくっとした。

「この論文は 65 年ものあいだ、この瞬間をただひたすら待っていたんだ」

この論文はコピーをとられることはおろか、印刷されてから 65 年間、一度も読まれた形跡がないのだ。おそらくこのページは開かれることもなかったらしい。米国で発行されてからじつに 65 年、異国の地で、この論文は、わたしのような人間がどこからかやってくるのをただひたすら待っていたのである。著者はもう何十年も前に亡くなっている。65 年間、人目にふれることもなかったこの論文は、時間と空間を超えて、読者であるわたしに出会うためにここで待ちつづけていたのだ。

「ああ、私の仕事とはこういうものだったんだ。この仕事についていて本当によかった」と感慨でいっぱいになった。

この論文のように出版された当時から、世界の図書館に散らばったにもかかわらず、ほとんど読まれない論文は多くあるのだろう。存在すら忘れられていく。しかし、それでもいいのだ。

流行に背をむけて書くわたしの論文も、たぶん読まれることもなく、あちこちの大学の図書館で眠りつづけているにちがいない。欧米の一流誌であれば、それこそ多くの国の大学の図書館へ散らばっているだろうが、相かわらず眠りつづけていることだろう。

そして、いつの日か、どこからかやってきただれかの目にふれる。50 年後かもしれないし、100 年後、あるいはもっと先かもしれない。わたしにとっては手のとどかない未来。想像もつかない未来。それでも未来はかならずやってくる。そしてそのとき、その読者が数行でも読んで何かを感じてくれれば、それでいいのだ。

願わくは、「へえ、65 年も前に、こんなことを考えていたやつがいたんだ。道具も分析も古めかしいけど、このアイデアはいまでも使えそうだぞ」と私と同じように、だ

れかが感じてくれれば、もう何もいうことはない。論文をみてくれた人が、学生でも子どもでもかまわない。そんな瞬間がくること自体に価値があるのだ。そんな瞬間を未来のだれかと分かちあうために、わたしは論文を書きつづける。

(高橋伸夫『できる社員は「やり過ごす」』日経ビジネス文庫、2002年、204-206頁)

私は顔もしらない高橋氏のこの文章を読んで、胸が熱くなったことを覚えている。

2013年8月16日 記